

近代における名詞「アカツキ」の文法化について
— 『日本語歴史コーパス明治・大正編 I 雑誌』の調査による —

Grammaticalization of the Noun ‘Akatsuki’ in Modern Japanese: An Investigation of
“The Corpus of Historical Japanese: Meiji / Taishō Era Series I Magazines”

劉 小 妹

LIU, Xiaomei

岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要
第48号 2019年12月 抜刷
Journal of Humanities and Social Sciences
Okayama University Vol.48 2019

近代における名詞「アカツキ」の文法化について
——『日本語歴史コーパス明治・大正編 I 雑誌』の調査による——
Grammaticalization of the Noun ‘Akatsuki’ in Modern Japanese
——An Investigation of “The Corpus of Historical Japanese: Meiji / Taishō Era
Series I Magazines”——

劉 小 妹 LIU, Xiaomei

1. はじめに

現代語では、名詞「アカツキ」は、本来の「早朝」の意味で使われる一方、「過疎を脱することも、それが成功した暁にはできると思います。」(黒澤丈夫『わが道これを貫く』2005)、「しかし、ことが成就した暁には貴子に十五億を配分することになっている。」(梁石日『裏と表』2004)のように、「物事が成し遂げられたとき」という意味でも使われている。このような用法の「アカツキ」には「早朝」の意味はなく、機能語化している。つまり、名詞から従属接続詞へと文法化している。本稿では、『日本語歴史コーパス明治・大正編 I 雑誌』の用例調査を通して、「アカツキ」の文法化の近代における状況について考察する。

2. 先行研究

考察に先立ち、「アカツキ」に関する先行研究として田中(2010)、従属接続詞に関する先行研究として村木(2010)を取り上げる。

2.1 田中(2010)

田中(2010)では、英文法で相関接続詞として“so~that”や“such~that”などを「結果節」と称するのに倣って、日本語の副詞節の中にもこのようなものが存在するとし、「~結果」を代表とする一連の副詞節は、常態以上程度が甚だしい状況を提示し、その影響下で結果事態が導かれることを表すことから、「結果誘導節」と命名した。「結果誘導節」は、広義には原因理由節と言えるものの、そのなかには、常態と比べて前件の状況が甚だしい程度と個別の主観的な評価、判断が介在することを指摘した。そして、結果誘導節に使われるいくつかの複合辞を取り上げ、それぞれの意味と機能、さらに類義表現の異同について考察を行っている。そこで取り上げられているのは、「結果」「すえ(に)」「はて(に)」「あかつきには」「あげく(に)」「あまり」「てまえ」「ばかりに」「だけに」「だけあって」「だけで」「からには/からは」「以上(は)」「うえは」である。「あかつきには」は「すえ(に)」「はてに」の類義表現として考察されている。ただし、ここでは「すえ(に)」の記述が

メインで、「あかつきには」については次のように記述している。

「あかつき」は「あかつきには」の形で、「はてに」と同様に相応の時間の経過を経て成就、達成、到達した結果事態を自認したり見越したりしてのべるものだが、選挙演説などに見られるように、未実現の状態での期待、決意を表明する。「もし、条件が満たされれば」のような想定を含意し、「待ち望んでいたことが実現する、そのときは」といった意味を表す。

- (54) a. 当選の暁には、必ず皆さまのお役に立ちます。
b. 取引成功のあかつきには、社長から特別のボーナスが出るそうです。
c. 勝利を得たあかつきには、国民の皆様のために粉骨碎身の努力をいたします。
d. 交渉が成立したあかつきには、君を部長に推薦してあげよう。 (田中 2010: 146)

田中 (2010) の考察から、現代日本語では、「あかつき」が用いられた副詞節は、長時間の経過を経て成就した結果という意味を表し、そして、従属節と主節の間には、時間関係と因果関係の側面が絡んでいるほか、未実現の出来事に対する期待という評価的な感情も含まれることがわかる。

2.2 村木 (2012)

日本語の従属節の分類にあたって、村木 (2012) は、自立名詞の受ける連体節を「真性連体節」、非自立的な名詞の受ける節を「擬似連体節」と呼んでいる。そして、擬似連体節をうける非自立的な名詞の中から、接続詞に相当する機能を果たしている単語を取り出し、「従属接続詞」と認定している。

従属接続詞について、さらに次のように説明している。

従属接続詞とは、「節や句をまとめる述語（動詞・形容詞・名詞+コピュラ）とくみあわさって、その節や句の後続の主節に対する関係をあらわすために発達した補助的な単語」と定義できる（高橋太郎ほか (2005) の文言を若干修正した）。従属接続詞についても、後置詞と同様、動詞や名詞を起源にもち、それが文法化した結果、節や句をまとめる述語とくみあわさって、先行する節や句を後続の節につながるものとして発達したものであるといえる。

(村木新次郎 2012: 43)

動詞起源の従属接続詞としては「したがって」「つれて」「あたって」などを挙げている。名詞起源の従属接続詞としては「とき (に)」「おり (に)」「際 (に)」「あいだ (に)」「ころ (に)」などを挙げている。

3. 近世までの「アカツキ」の使用状況

近代の状況を見る前に、辞典類の記述を参考にして、奈良時代から江戸時代までの「アカツキ」の使用の状況について概観しておく。

『日本国語大辞典』では、「あかつき」の語義について、次のように説明している。

- ①夜半過ぎから夜明け近くのまだ暗い頃まで。未明。また、夜明けに近い時分。現在では、明け方のやや明るくなった時分をいう。②あかつきおき（暁起）の略。③香木の名。分類は伽羅。④ある物事が実現したその時。また、物事の解決、処理。始末。

文法化につながる④の用法の初出例は、「歌舞伎・与話情浮名横節（切られ与三）「1853」五幕「金か香るふか二つに一つ、コウ半頭さん、いいかげんに往生しなせへ。此暁（アカツキ）はどうしてくれるよ」である。

また、語誌について次のように記述している。

- (1) 上代には「あかとき」で、中古以後「あかつき」となって今日に及ぶ。もともとは、夜を三つに分けたうちの「宵」「夜中」に続く部分をいったが、明ける一步手前の頃をいう「しののめ」、空が明るくなる頃をいう「あけぼの」が、中古にできたために、次第にそれらと混同されるようになった。
- (2) 中古では「あかつき」は歌・散文の双方に用いられるが、「あけぼの」は基本的には文章語（中世和歌には多い）、「しののめ」は歌語である。通い婚の習俗では、「あかつき」は男が女と別れて帰る時限であり、「あかつきの別れ」などの表現もある。一方、男が訪れるのは「よい」であり、「よいあかつき」と熟した例も見られる。

『時代別国語大辞典 上代編』では、「アカトキ」の語義について、「夜明け方、また、その前。」と説明している。

『時代別国語大辞典 室町編』では、「アカトキ」の語義について、「夜の明けるころ。」と説明している。また、「参考」の欄でつぎのように記述している。

当代には、「あけぼの」と区別せず、明け方のやや明るみのある時分をいった。女の家に通って来た男が翌朝起きて帰途につく時分を「あかつき」とすることは、古くから当代にも続いていて、「明け六つ」すなわち午前六時ごろを指すのが一つの目安となっていた。

『古語大辞典』では、「アカツキ」の語義について、「夜明け前のまだ暗いころ。「曙（あけぼの）」

よりもやや早い時刻」と説明している。また、語誌について次のように記述している。

明時（あかとき）の意（和訓栞）。奈良時代は「あかとき」、平安時代から、「あかつき」となる。「明つ月」のような俗解が働いたためか。万葉集では、「あかとき」に「暁」「五更」「旭時」「鶏鳴」の文字を当てているが、「五更」は午前三時から五時の間であり、「鶏鳴」は一番鶏（いちばんとり）の鳴く夜明け前の時刻である。従って、「あかとき」は深更から、夜がほのほのと明けてくるまでをいったと考えられる。平安時代に入ると「しのめ」「あけほの」と細分化されてくるが、「あかつき」が夜深い刻限を指したことは、源氏物語に「よひ・あかつき」という言い方が多く見えることや、「夜深きあかつきづくよ」「うばたまのあかつきやみ」などの用例があることからいえる。

以上の辞典類の記述から近世までの「アカツキ」の歴史をまとめると、上代では、夜半の意味を表す「アカトキ」であったものが、中古以後は「アカツキ」となり、その意味も次第に夜半から夜明けに近い時分に移り変わり、現在ではほぼ早朝の意味に定着した。そして、近世になると、物事が実現した時や物事の解決、処理、始末を表す用法が生まれた、ということになる。

4. 近代における「アカツキ」の使用状況

この節では、『日本語歴史コーパス明治・大正編Ⅰ雑誌』を用いて「アカツキ」の使用状況を調査した結果を述べる。まず、4.1で調査の方法と用例数について述べた後、用例を「早朝」を表すものと「とき」を表すものに大きく分け、それぞれの文法的な特徴を見ていく。

4.1 調査の方法と用例数

『日本語歴史コーパス明治・大正編Ⅰ雑誌』は、明治期から大正期までに刊行された代表的な雑誌を6～8年間隔で収録している。明治前期の資料としては、『明六雑誌』（1874・1875）の43号分、『東洋学芸雑誌』（1881・1882）の15号分が収録されている。明治中期から大正までの資料としては、『国民之友』（1887・1888）の36号分、『太陽』（1895・1901・1909・1917・1925）の60号分が収録されている。また、『太陽』の比較資料として、読者層が女性である『近代女性雑誌コーパス』が公開されており、そこには、1895年、1909年、1925年の各年に最も読まれている雑誌である、『女学雑誌』（1894・1895）の31号分、『女学世界』（1909）の6号分、『婦人倶楽部』（1925）の3号分が収録されている。

『日本語歴史コーパス明治・大正編Ⅰ雑誌』¹は、ジャンルが多種多様で、執筆者が多く、読者層も学生、成人、女性と広範囲に渡っている。当時の日本語の書き言葉の実態を多角的に把握することができるだけでなく、近代の文語体から現代の口語体に移り変わる時代の代表的な雑誌をカバーしているので、近代語の通時的な変化を捉えることもできる。

検索にあたっては、語彙素読みが「アカツキ」であることを条件とした。検索結果から、「無分暁」、「暁景」などの形態素の解析が誤っているものを除き、「アカツキ」の用例325例を得た。資料別・年代別の分布は、表1の通りである。斜線は、その年の雑誌がコーパスに収録されていないことを意味する。

表1 『日本語歴史コーパス明治・大正編Ⅰ雑誌』における「アカツキ」の用例数

刊行年	国民之友	女学雑誌	女学世界	婦人倶楽部	太陽
1887	4				
1888	15				
1894		8			
1895		9			68
1901					51
1909			18		53
1917					47
1925					43
計	19	17	18	9	262

明治前期の『明六雑誌』、『東洋学芸雑誌』には「アカツキ」の用例が見つからなかった。『国民之友』には19例、『太陽』には262例、『近代女性雑誌』には44例見られた。用例が『太陽』に集中しているのは、コーパス中のデータ量が多いからである。

4.2 意味による用例分類と記事の種類別の分布

以上のようにして収集した325例の「アカツキ」の用例は、意味の観点から、例1のように、「早朝」の意味を表すものと、例3のように、そうした語彙の意味を失って、より抽象的な「とき」の意味で使用されているものに分類することができる。

- 1) 私はまた数へ出した——考もなく感じもなく——死んだやうに——が到頭眠つて了つたらしい。翌朝、不意に起きると、うらかな、晴々しい暁の光が小さな室内に差込

¹ 『日本語歴史コーパス明治・大正編Ⅰ雑誌』に収録された各資料のデータ量は次の通りである。『明六雑誌』（延べ語数18万語）、『国民之友』（延べ語数101万語）、『女性雑誌』（996897字）、『女性世界』（679551字）、『婦人倶楽部』（463128字）、『太陽』（14455540字）、『東洋学芸雑誌』は確認できていない。

でゐた。(『太陽』10「点滴」中原青燕(訳)/ハインツ、トフォーテ 1909 口語)

- 2) 各生徒は自己の見て以て信頼するに足ると思ふた教師の講義を聞くといふ事になつて居るから自ら教師も同一ノートを毎年繰り返すなどといふ事は、絶対に出来ないので、若しその様な事の解つた暁には、大に物笑ひの種となるのである。(『太陽』4「北米の大學」安倍磯雄 1909 口語)

資料別のそれぞれの用例数と割合を表2に示す。「とき」の意味で使用されているものが「早朝」の意味を表すものを大きく上回っている。

表2 「アカツキ」の意味別・資料別用例数

作品名	「早朝」の意味	「とき」の意味	計
国民之友 (1887、1888)	6 (31.58%)	13 (68.42%)	19
女学雑誌 (1894、1895)	14 (82.35%)	3 (17.65%)	17
女学世界 (1909)	12 (66.67%)	6 (33.33%)	18
太陽 (1895、1901、1909、1917、1925)	79 (30.15%)	183 (69.85%)	262
婦人倶楽部 (1925)	3 (33.33%)	6 (66.67%)	9
計	114 (35.07%)	211 (64.92%)	325

次に、意味によって分類したそれぞれ用例がどのようなジャンル・文体の記事に出現しているかを見ておこう²。

表3は、「アカツキ」の使用された記事のジャンル別の用例の分布である。

表3 「アカツキ」の使用された記事のジャンル

ジャンル	早朝	とき	ジャンル	早朝	とき
食用作物	0	1	宗教学・宗教思想	1	0
鉄鋼	0	2	宗教史・事情	1	0
アジア	2	3	商業経営・商店	0	1
その他の宗教・新興宗教	1	0	商業史・事情	0	1
なし	6	13	小説・物語	17	7
ヨーロッパ	2	0	森林利用・林産物・木材学	1	0
衣食住の習俗	1	0	人口・土地・資源	0	1
衛生学・公衆衛生・予防医学	0	1	人生訓・教訓	0	2
衛生工学・都市工学	0	2	政治・経済・社会・文化事情	3	24
演劇	0	1	政治学・政治思想	0	6
音楽	0	1	政治史・事情	2	11
家族問題・男性・女性問題・老人問題	0	2	政党・政治結社	0	5
家庭衛生	1	0	戦争・戦略・戦術	0	3
科学史・事情	0	1	総記	1	0
貨幣・通貨	0	1	大学・高等・専門教育・学術行政	0	2
海運	0	3	団体	1	0
海軍	0	6	知識・学問・学術	0	1

2 『日本語歴史コーパス明治・大正編Ⅰ雑誌』では、記事に対応する図書分類番号・文体・会話体に関するタグが付与されている。

外交・国際問題	0	12	茶道	1	0
各教派・教会史	1	0	通過儀礼・冠婚葬祭	0	1
各種の船舶・艦艇	0	1	通信事業史・事情	0	1
漢詩文・日本漢文学	1	0	鉄道	0	3
記録・手記・ルポルタージュ	1	1	天文学・宇宙科学	0	1
戯曲	0	1	日記・書簡・紀行	8	1
議会	0	6	日本	1	2
教育史・事情	2	3	日本の建築	1	0
教育政策・教育制度・教育行財政	0	2	日本史	2	2
金融・銀行・信託	0	1	日本思想	1	0
刑法・刑事法	1	0	日本文学	4	6
系譜・家史・皇室	1	1	年中行事・祭礼	1	0
経済学・経済思想	0	1	農業経済	1	4
経済史・事情・経済体制	0	7	評論・エッセイ・随筆	6	2
経済政策・国際経済	0	4	文章・文体・作文	2	0
研究法・指導法・科学教育	0	1	兵器・軍事工学	0	1
言語学	0	1	放送事業	0	1
個人伝記	4	5	法学	0	1
工業・工業経済	0	3	法律	0	1
行政	0	1	邦楽	1	0
国家と個人・宗教・民族	0	3	貿易	0	3
国家の形態・政治体制	0	1	民間信仰・迷信〔俗信〕	1	0
国際法	0	4	幼児・初等・中等教育	0	2
国防史・事情・軍事史・事情	1	0	理論天文学・数理天文学	3	0
国防政策・行政・法令	0	1	陸軍	0	3
財政史・事情	0	1	流体機械・流体工学	0	3
財政政策・財務行政	0	2	労働経済・労働問題	0	5
詩歌	28	1	論文集・評論集・講演集	1	1
社会学	0	3	計	114	211

「早朝」の意味で使用された用例数の上位の3ジャンルは「詩歌」(28例)、「小説・物語」(17例)、「日記・書簡・紀行」(8例)であり、「とき」の意味で使用された用例数の上位の3ジャンルは、「政治・経済・社会・文化事情」(24例)、「外交・国際問題」(12例)、「政治史・事情」(11例)である。近代において、「早朝」を表す「アカツキ」はすでに文学的な言葉になっていたようである。一方、従属接続詞へとつながる、「とき」の意味で使用される「アカツキ」は政治・経済・国際に関する文章を中心的な舞台として発展してきたと考えられる。

次に、文体に関する分布を表4、5に示す。

表4 「アカツキ」の使用される記事の文体（口語・文語）

	早朝	とき	計
文語	87 (76.3%)	94 (44.8%)	181
口語	27 (23.7%)	117 (55.2%)	144
計	114	211	325

表5 「アカツキ」の使用される記事の文体（会話・非会話）

	早朝	とき	計
会話	0 (0.00%)	17 (8.1%)	17
非会話	114 (100%)	194 (91.9%)	308
計	114	211	325

「とき」の意味で使用された「アカツキ」は、「早朝」を表すものよりも口語体での使用率が高く、また、「早朝」を表す場合には見られなかった会話での使用が見られる点が注目される。

4.3 「早朝」を表す「アカツキ」

ここでは、「早朝」を表す「アカツキ」について、江戸時代の「アカツキ」との違いを中心にしておく。すでに見たように、江戸時代の「アカツキ」は、夜明け後の意味だけでなく、夜明け前の意味を表すものもあり、そして、文法化の萌芽といえるような「とき」の意味で使用されるものも現れた。

では、『日本語歴史コーパス明治・大正編 I 雑誌』から収集された114例の「早朝」を表す「アカツキ」について、実際の用例の具体的な意味を観察する。

- 3) 伯が三田尻より氷上湯田等に移り、後又太宰府に移りまし折々毎に、忍び忍びにふみの行かひをなして、夜の鶴の音に鳴きつつ西の空に傾ぶく月影をながめ、獨りたもとをしほりまし暁も多かりけらし。(『太陽』5「東久世伯の母君」佐々木信綱 1895 文語)
- 4) 翌朝、不意に起きると、うららかな、晴々しい暁の光が小さな室の内に差込んでゐた。(『太陽』10「点滴」中原青蕪 (訳) /ハインツ、トフォーテ 1909 口語)

例3は夜明け前の意味を表すもので、例4は夜明け後の意味を表すものである。このほか、次のような用法も見られる。

- 5) 生れて初めて二十年の暁、封印といふ忌はしきもの家内の彼處此處に手當り次第貼り付けられてくちをしさ、數代榮えし暖簾は美事かくして傷けられぬと都の妹より言ひ越されし時。(『女学世界』5「人情科學」細川俊子 1909 文語)

例5のような「アカツキ」は、比喩的な意味で使用されたものと考えられる。文法化の萌芽といえよう。

4.4 「とき」の意味で使用される「アカツキ」

次に、「とき」の意味で使用される「アカツキ」についての調査結果を述べる。

4.4.1 文中での機能

「アカツキ」が「とき」の意味で使用されるようになると、単独では機能できなくなり、連体的な成分と一緒に文の成分を構成するようになる。したがって、ここで見る文の機能は、連体

的な成分と組み合わせさせた「アカツキ」の文中での機能である。「とき」の意味で使用されている「アカツキ」の文中での機能の分布を表6に示す。

表6 「とき」の意味の「アカツキ」の文中での機能

主語	補語	述語	規定語	状況語	述語	計
1 (0.47%)	21 (9.95%)	10 (4.74%)	2 (0.95%)	177 (83.89%)	10 (4.74%)	211

「とき」という意味からして、状況語としての使用が多いのは当然のことであると言えるが、連体的な成分と一緒に使用されるということ踏まえれば、後置詞や従属接続詞的な使用が中心となっていると考えられる。

まず、主語として使用された用例を挙げる。

- 6) 區劃整理さへ容易に付けられず公園の増設擴大など思ひも寄らぬ迄に俗論黨が跋扈して、理想的大東京の建設が妨げられつつあるとは云へ、いつかは立派な大東京の理想が實現せられる暁もあらう。(『太陽』10「我が方丈記—荒み行く」生方敏郎 1925 口語)

次に、補語として使われている用例を見ていく。例7～11はヲ格をとった例、例12～17はニ格をとった例である。

- 7) 其の如何に成り行くべきかは固より知るを得ずと雖も、他日愈々平和恢復の暁を迎ふるの時に至らば、交戦各國は各々其の創痕恢復の必要上又は國債償還の元資獲得の爲め、戦時に養ひ得たる忍耐克己の大精神を實業方面に轉換發揮し來るべき事は豫め覺悟すべき所で、(『太陽』2「戦時に於ける我が事業界の趨勢」岡実 1917 口語)
- 8) 其議の採用と否とに拘はらず、今にも外資輸入の暁を見るに於ては、忽ち資本の缺乏に困蔽したる我が事業界は、茲に斷然其頭を擡げて、資本の潤澤、金利の下落、株式騰貴の趨勢を致し、所謂一陽來復の氣運に到達すること、月を期して俟つべきなりと。(『太陽』14「外資輸入国としての日本」近藤廉平 1901 口語)
- 9) 多數の意見が全部一致する暁を俟つて居つたら、何時の間にか機會が抜け勢が去つて、合同は終に困難になつて來る。(『太陽』5「主義政綱は無用 新政黨觀」石正巳 1909 口語)
- 10) 雖然此の評定より算し來れば我が日本は僅かに埃及の上に進たるに外ならず、而して其の獨立の体面を全するに到る迄には第二十世紀(千九百三年)即ち明治三十七年の暁を待たざる可らず、待てよ待てよ、我邦が國際の條約上に於て純然たる獨立國と認めらる

る迄には今日紅顔の青年は倔強なる壯夫となりて待てよ、(『国民之友』 2「條約改正會議の評定」1887 文語)

- 11) 帝室内閣は、果して政党内閣に優るものなりや否やは、目下燒眉の問題にして、決して二十三年國會開設の暁を埃つの猶豫あらざるを知ればなり、在朝の諸公は此の如く、國事に鞅掌せり、吾人は實に感佩するの外なきなり、(『国民之友』 7「大隈、板垣、及び後藤氏」1887 文語)
- 12) 然し歐米に於て聯邦成立したる暁に在ては東洋は自己防衛上より云ふも、亦國際的進歩の順序としても是非聯邦或は同種の性質のもの組織の必要に迫らるる事は必ず明かである。(『太陽』 6「戦後に於ける世界平和耐久策を論ず」泉哲 1917 口語)
- 13) 故に谷子爵の如き憂國者は大息して、我國民は國家破産の暁に至らざれば目の覺むることなきかと云へり、此の如き愚昧を醫し邪説を遏めんとするには、教育より外に良法あることなし、(『太陽』 9「国民の經濟」西村茂樹 1901 文語)
- 14) 釐金税其他の制限有りて運漕の自由狹隘なる間は、貿易の状態常に地方的たるを脱する能はずして、其膨張期し得べからざるも、異日一は山西より他は河南の信陽より南京の對浦岸口に達する二條の鐵道開通の暁に至らば、南京は其位置の漢口よりも海に近く、且港内水深ふして、常に大船を泊せしむべき便宜有るを以て、安徽、河南及山西諸省より産出する鑛物及多數の貨物にして、従前漢口に出でたるもの、(『太陽』 14「南京通信」高木鉄次郎 1901 文語)
- 15) 而して人口漸く一平方里に千人許に過ぎず、之を我國人口の稠密なるに比せば、優に移住の我邦人を容るるに足る可きなり、殊に京釜鐵道竣成の暁に達せば、各停車場毎に二十萬坪(六十六町餘)の地を韓廷より借入るるの約あるを以て、此等の地を商業工業に使用するは勿論、専ら農業上に利用し、農事上各般の試験を開始し、韓國農事改良の端緒を開き、更に廣く各地に我農民を移殖し、大に拓地種藝の業に従はしめば、韓國農事上に一新面目を開くに至るや、(『太陽』 10「韓国移民論」加藤末郎 1901 文語)
- 16) 飜つて憲政本黨を顧れば、曩きに卅數名の代議士は政見相異るが故に決然脱黨し、今や三四俱樂部として新政黨を樹立したるにあらずや。加之新選舉法實施の暁に徴せよ、幾多の新現象を顯はし、幾多の團體を現出するも、未だ知る可らざるなり。(『太陽』 8「内閣制と政党」佐佐友房 1901 文語)
- 17) 然るときは、二十世紀の歴史をして面目を一新せしむるならん、而して其の暁に臨まば、世界各國の人争ふて支那に至るを以て、世界全人口の凡そ三分の一は同國に輻輳すべく、(『太陽』 1「支那の将来」1895 文語)

次に、最も用例の多い状況語の用例を見る。はだか格、二格、ニテ格、マデニ格の例があるが、

二格の例が最も多い (177例中101例)。

- 18) 彼の早稲田文學に比して殆ど兄弟の觀あり、夫れ兄弟墻に闘ぐも外侮を防ぐとかや、吾人は此兩者の競争に於て我が文運の隆興を見んと欲するや切なり、不知彼のしがらみ草紙再誕の暁、果して何等の聲かある (『太陽』 2 「文学」 1895 口語)
- 19) 況んや法の問はざるあらば、内地開放の暁、或は雜婚の生ぜざるを保せず、雜婚可なり、可なりと雖も、其國民たるの思想を錯雜せしむるの點に鑑みば、何んぞ之を忌避せずして可ならんや、(『太陽』 8 「國民の政治思想」 吉村銀次郎 1895 文語)
- 20) 朝鮮の借款問題成立の暁、吾國が爲に少からざる政治的影響を蒙るのみならず、又五百萬兩の使送如恁くなるが爲に經濟的の損害を受くるも亦必ず多大ならん、(『太陽』 7 「海内彙報」 1901 文語)
- 21) それで若し今後土耳其政府の秩序が立ち、平時の状態に復する暁には、必ず例の回教擁護、外教壓迫といふ土國固有の鋒芒を顯はすのが必然の勢で、斯くて又マセドニヤ問題が持ち上る。(『太陽』 10 「名士の土耳其觀 土國雜觀」 松石安治 1909 口語)
- 22) その西洋劇評の紹介には此の人の生命がありはしないかと思はれる。自由劇場が出来る暁には氏は小説の筆を斷つと云ふ話だ。(『太陽』 16 「帝國大學派文士の長短 文界の勢力如何」 1909 口語)
- 23) 西伯利亞廣袤歐洲の全面よりも大に、恰かも支那と相匹似するは西伯利亞に非ずや、人口稀少、氣候沍寒と雖も、露國政府孜孜として其の開拓を努め、今や五年の後を待つて、一條の鐵路その東端浦鹽斯德より、遠く歐洲の西端まで通ぜんとす故に此の鐵道成るの暁には、我が日本と歐洲との交通は、多く之に由ることならん、(『太陽』 10 「時事」 * 1895 文語)
- 24) 尚此の外に千九百十九年までには、戰艦九隻、偵察艦六隻、驅逐艦約三十隻、潜水艇約二十隻を建造する計畫なれば、その竣功を告げたる暁には、愈々優勢たる海軍となるは、嗚々を要せぬ。(『太陽』 5 「名士の佛國觀 佛國の海軍」 鳳生 1909 口語)
- 25) 「何となれば我國の文物制度たる政治上に於て、經濟上に於て、教育上に於て、將た亦美術工藝其他一般の社會制度に於て、孰れも未だ過渡時代に屬し、丁度建築中の建物を見るが如く、凡て纏まつた者を見ない。竣工の暁までには今後數十年の日月を要するであろう。(『太陽』 10 「貴族院と政黨」 秋元興朝 1909 口語)」は狀況語の例である。

規定語として使われた用例は、次の2例のみである。

- 26) 支那の鐵礦、皮革、羊毛、棉花は必ずしも戰時に於ける我國所要の額を悉く充當し得る

と斷言は出来ないが、尚ほ之れあらば以て戦ふに堪ふべきである。支那の鐵礦、皮革、羊毛、棉花なき暁の我國は水に離れた河童同様であることを思はなければならぬ。(『太陽』 4「海軍建設の目標」安井正太郎 1917 口語)

- 27) 海上交通を遮斷せられし——殊に支那との海上交通を遮斷せられし——暁の我國が軍事上並に經濟上の資源枯渴して到底戦ひに堪へざるべきは本誌前號の拙文に於て略ぼ説述せしが如くである。此見地よりして之を觀る。(『太陽』 5「潜水艇政策の利害」安井正太郎 1917 口語)

次は、コンピュータを伴って述語として使われた用例である。

- 28) 第二は日本及び東洋の自動にあらずして、歐洲一強國の野心より生ずる結果とす。こは今より五年の後にして西比利亞鐵道竣工の暁なり。元來西比利亞鐵道が豫期の時日中に竣工することは、世人の疑を容れし處なりしに、今は其の竣工日を期して待つべきにいたれり。(『太陽』 8「一大外交」稲垣満次郎 1895 文語)
- 29) 尤も男爵の御活動の非常に多方面なるにも拘はらず學者を以て本領とせらるる男爵の御功績記念の計畫を致しまするに還曆といふが如き機會に於てすることは穩當でない不適當であるといふが如き掛念もありましたけれども、前に述べました如く、度々機會を逸しましたる暁であり又々此機會を逸しましては(『太陽』 12「菊池大麓先生」藤沢利喜太郎 1917 口語)

4.4.2 動詞の述語形式

以下では、從属接続詞の用法の成立状況を見るために、特に、動詞の連体形に接続して連用的な格(はだか格を含む)をとる用例を対象として考察を進める。

まずは、動詞の述語形式について見る。表7は、「とき」の意味で使用された「アカツキ」が接続する動詞の述語形式の資料別・年代別の分布を示したものである。

表7 「とき」の意味の「アカツキ」が接続する動詞の述語形式の分布(資料・年代別)

形式	国民之友	女学雑誌		女学世界	婦人倶楽部	太陽					計	
	1888	1894	1895	1909	1925	1895	1901	1909	1917	1925		
過去	シ	0	0	0	0	0	1	2	0	0	3	
	シタ	0	0	0	3	4	2	4	11	9	15	48
	シナカッタ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
	タル	1	1	2	0	0	1	4	5	8	2	24
	タルノ	1	0	0	0	0	2	0	0	1	0	4
	小計	2	1	2	3	4	5	9	18	18	18	80

非過去	サレル	0	0	0	0	0	2	0	5	0	0	7
	スベキ	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
	スル	0	0	0	0	0	4	1	4	2	0	11
	スルノ	1	0	0	0	0	4	1	3	0	0	9
	セヌ	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
	セン	0	0	0	0	0	1	3	1	0	0	5
	小計	1	0	0	0	0	12	5	14	1	0	34
計	3	1	2	3	4	17	14	32	20	18	114	

現代語ではほぼシタ形式に限定されているのに対して、スル形式や否定形、推量形など、この時期にはまだ様々な述語形式が現れていることが分かる。

最も大きな問題は、過去形のみならず、非過去形の例が少なくないということである。表7をテンスの観点から年代別に作り直したのが表8である。この表より、この時期に次第に過去形へと固定化が進行していることが分かる。

表8 「アカツキ」が接続した動詞のテンス形式の分布 (年代別)

	1888	1894	1895	1901	1909	1917	1925
過去形	2	1	7	9	21	18	22
非過去形	1	0	12	5	14	2	0

現代語の「トキ」が従属接続詞として使用されるときには、述語のタイプによって、重複的同時性（「この前、ここを歩いている時、きみのことを思い出した」）または接触的同時性（「青山先生は、倒れたときに産婦人科の病院にかつぎこまれたんですよ」）を表す（工藤 1995）。主節の出来事は過去であっても未来であってもよい。これに対して、「当選した暁には、税金を引き下げます」のように、現代語の「アカツキ」の場合は、未来の出来事でなければならない、主節と従属節の時間関係は接触的同時性である。現代語の「アカツキ」が接続する動詞が過去形に固定されているのは、動詞が表す出来事の結果段階と主節の出来事の同時性を表すためである。

現代語と違って、近代語の「アカツキ」には、数は多くないが、過去の出来事の例も見られる。

- 30) 彼れの身體を強壯にするが爲めに、あらゆる氣候環境を試みたのである、或る時は南佛蘭西に、或る時は桑港に、又或る時は布哇のホノルルに住んだ、さうして彼れは彼れの活動期の後半を南洋の島々にて過ごした暁に、千八百九十四年（明治二十七年）サモア島で死んだのである、彼れは一大文豪であつた、（『太陽』4「吉田寅二郎とロバート・ルキ・スチヴェンソン」田内長太郎（訳）/藤沢利喜太郎 1925 口語）

ただし、この例の「アカツキ」を「トキ」に変えることはできない。「決定する」のような内的限界動詞の場合は両者は近づくが、「過ごす」のような非内的限界動詞の場合、「アカツキ」には「時

間の経過を経たのちに」という意味が前面化するためである。

「トキ」が接触的同時性を表すとき、非過去形（スル形式）は動詞が表す出来事の將然段階と主節の出来事の同時性を表す（「帰って裏門のくぐりを入る時、真知子は郵便箱を覗いて見た」）。一方、近代の「アカツキ」では、動詞の非過去形は、そのようなアスペクト的な意味を表さず、未来というテンス的な意味を表していたと考えられる。このことは、「セン+アカツキ」といった未来の推量を表す形式が現れることから分かる。

- 31) 愈これを決定する暁には、政府より與ふる制裁には如何なる良手段ありや。建議書は右の如し、而してかかる運動に賛成せる言語學者には、實に左の諸氏ありたりしなり。（『太陽』7「歐洲諸國に於ける綴字改良論」上田万年 1895 文語）
- 32) 今日こそ帝國大學の出身者のみを以ては、朝野の需用を満たすに足らずとは云へ、年々歳々百餘名の學士を出だし、更に大學の増設を見ん暁には、益々其數を増加すべきこと火を睹るより明なるに、悠々として在來の作戰計畫に據て、競走場裡の勝を制せんとす、敗れざらんとするも能はざるなり、（『太陽』10「法律時評」岡田三面子 1901 文語）

近代の「アカツキ」の例で未来の出来事に過去形が使われている場合は、現代語と同じく、接触的同時性であり、結果段階というアスペクト的な意味を表していると見てよいだろう。このような例が増えていき、現代語の「アカツキ」につながることになる。

- 33) 其の時機に達した暁には商業は即ち平和の擁護者なりと言ふことも出来るであらう。（『太陽』14「歐洲戰亂と民主政治の新傾向（第二）」浮田和民 1917 口語）
- 34) 何んでも憲法と皇室典範とが完璧になつた暁には、樞密院を出て政治をやつても宜しいと云ふ顔色だつたワイ。少々野心が出て來たかも知れんぞ。併し成るべくは官僚の手を借らないで原内閣を作ることサ。（『太陽』5「國民黨の計略、政界の前途」無名隱士 1917 口語）

次に、現代語には見られない、否定形式に「アカツキ」が接続した例について見る。以下は、その用例である。

- 35) けれども幸にして、普通選舉施行の氣運に醸成されつつあるために、労働運動は、激烈な度を盛々減じつつある。もし、今期議會に於て普通選舉が通過しなかつた暁に於ては順境に向ひつつあつた労働運動は、逆轉して層一層惡化の傾向を呈するに至るであらうことを私は恐れるものである。（『太陽』3「普選實施後の労働運動」安倍磯雄 1925 口語）

- 36) さなきに於ては折角の要求なるも應じ難きのみならず、假令艦隊司令官に申込まれるも採用は覺束なかるべし杯嚇し文句を并べて取合はざれば、四屋氏も屹となり、萬一司令長官に於て採用せぬ暁は、横濱駐節の貴國領事に照會する準備整へりとて引取り、同日更に艦隊司令長官に向け照會に及びたりと云ふ、知らず同長官もフオン、ドレスキー艦長と意見を同ふして之れを拒絶するや否や（日本）（『太陽』10「海外彙報」*1895 文語）

現代語の「アカツキ」と同じように、近代語の「アカツキ」も、動詞に接続して従属接続詞のように使われるようになっていくことが確認できるが、動詞の述語形式の固定化は進行途上であり、以上に見たように、様々な形式が現れる。

4.4.3 格・とりたて形式

続いて、「アカツキ」の格・とりたて形式の分布を見る。ここでも、対象は、動詞に接続する、従属接続詞的な用法である。まず、資料・年代別の分布を表9に示す。

表9 「アカツキ」の格・とりたて形式の分布

格	とりたて	国民	女学雑誌		女学	婦人	太陽					計
		之友	1888	1894	1895	1909	1925	1895	1901	1909	1917	
はだか格	φ	0	0	0	0	0	0	1	1	3	1	6
	ハ	0	1	0	0	1	3	0	4	2	1	12
二格	φ	1	0	0	1	1	0	1	0	3	2	9
	コソ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
	ハ	0	0	1	0	2	11	9	22	8	8	61
	モ	0	0	0	2	0	1	0	0	0	0	3
二格+オイテ	ヤ	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
	φ	0	0	0	0	0	0	2	2	2	1	7
	コソ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
	ハ	1	0	0	0	0	0	1	3	0	3	8
	モ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
ニテ格	ヲヤ	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	2
	φ	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
マデニ格	ハ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
計		3	1	2	3	4	17	14	32	20	18	114

現代語では、従属接続詞としての「アカツキ」の格・とりたて形式は、「～ニハ」にはほぼ固定化されているが、この時期においては、様々な形式が存在している。では、この期間に固定化の進行が見られるかを調べてみる。表9を格およびハによるとりたての観点から年代別に作り直したのが表10、11である。

表10 「アカツキ」の格形式の分布（年代別）

	1888	1894	1895	1901	1909	1917	1925	計
はだか格	0	1	3	1	5	5	3	18
ニ格	1	0	14	10	25	11	14	75
ニ格+オイテ	1	0	2	3	5	3	5	19
ニテ格	1	0	0	0	0	0	0	1
マデニ格	0	0	0	0	0	1	0	1
計	3	1	19	14	35	20	22	114

表11 「アカツキ」のハによるとりたて形式の分布（年代別）

	1888	1894	1895	1901	1909	1917	1925
ハによるとりたて	0	1	15	10	29	10	15
総数	3	1	19	14	35	20	22

表10によると、明確な推移は見られないものの、ニ格が中心であるという状況は早期に確立していたようである。はだか格の18例のうち、12例はハによってとりたてられていて、とりたてのないはだか格は6例である。BCCWJを検索すると、「アカツキニハ」が127例であるのに対して、「アカツキハ」が8例見つかる。「アカツキ」の語形は、現代語においても、完全に「～ニハ」に固定化されているわけではないのである。

現代語との明確な違いは、次のような、とりたてのないはだか格の例が見られることである。

- 35) 今假りに所管はどこでもよいとして、同所が全く設立になつた暁、如何なる人に研究を託すべきであるか。（『太陽』4「理化学研究所の所管」遊方子 1917 口語）
- 36) 此可憐なる少女が一生の願の一つは、兄が目出たく卒業證書を得て、學位の榮譽を荷つた暁、自分と二人で立並んで、美々しい大形の寫眞を撮りたいといふ其である。（『太陽』9「一腹一生」小栗風葉（作）1901 口語）
- 37) 戦争は此上猶ほ繼續すべきものとしても、愈々各國と同一歩調を取つて講和會議に臨む暁露國の提議する條件は此の社會黨の主張と同一であらねばならない。折角正義公道を踏むの共和制度を布いても、政治の當路者が帝國主義野心を抱く時は必ず終には共和を破壊する。（『太陽』6「混沌の露西亞 革命の齋らす曙光」内田魯庵 1917 口語）

こうしたとりたてのないはだか格の「アカツキ」と「アカツキニハ」「アカツキハ」の意味的な違いははっきりしないが、主節に「～すべきだ」「～したい」「～しなければならない」という述べ方がくると関係があるかもしれない。

なお、ニ格に後置詞（オイテ）が接続した例が特に『太陽』に多く見られるが、ニ格との違いは、文体差以上のものではないようである。

- 38) 現に今日衆議院議員の選挙権（納税額十圓以上）を有せずして単に縣會議員の選挙権（五圓以上）をのみ有する人々の内には、衆議院議員の選挙を以て、府縣會議員の選挙よりも、多くの利得あるものの如く想像し居るものがあるが如きを以て、是等の人々が一朝選挙権を獲得したる暁に於て、府縣會選挙以上の金銭利益を收得せんとの希望を以て、選挙に臨むことなきや否や、憂慮に堪へざる處なり、(『太陽』6「選挙界の腐敗矯正に就きて」小川平吉 1917 文語)

表11によると、ハによるとりたての例は、早期に5割を越えていることが分かる。一方で、とりたてのない形も2割ほど見られる。例えば、次のようなものである。

- 39) そこで戦雲歛まり、平和の曙光歐洲の天地に輝いた暁に、世界の覇権を握るものは唯英と米との二國ばかりであつて、日本などは如何に藻掻けばとて、お相伴は出来ない。(『太陽』12「日本の歐洲戦亂に對する地位」千賀鶴太郎 1917 口語)

4.4.4 意味

この節で取り上げた「アカツキ」は、「とき」の意味で使用されたものであった。この用法につながる現代語の「アカツキ」の意味は、すでに見たように、先行研究では、「相応の時間の経過を経て成就、達成、到達した結果事態を自認したり見越したりしてのべるものだが、選挙演説などに見られるように、未実現の状態での期待、決意を表明する」(田中 2010)と記述されている。

近代語の「アカツキ」も、すでにそのような意味で使われはじめていることは、すでに挙げた用例から明らかである。しかし、そのような意味を伴わない用例もまた、すでに挙げた用例の中に見られた。ここでは、そうした意味的な側面から、「とき」の意味で使用された近代語の「アカツキ」を見ていく。

「アカツキ」が接続する動詞が表す出来事が「望ましい」ことかどうかという観点から、用例を分類し、その数を資料別に示したのが表12である。

表12 望ましきから見た資料別の用例の分布

	刊行年	望ましい	中立的	望ましくない	計
国民之友	1888	0	3	0	3
女学雑誌	1894	0	1	0	1
	1895	0	2	0	2
女学世界	1909	2	0	1	3
婦人倶楽部	1925	0	4	0	4
太陽	1895	11	6	0	17
	1901	7	6	1	14

太陽	1909	14	14	4	32
	1917	12	7	1	20
	1925	8	8	2	18
計		54	51	9	114

表12から、この時期においては、「アカツキ」に接続する動詞の表す出来事は、必ずしも望ましいものとは限らないことが分かる。現代語においても、望ましい出来事ではない例も見られるが、少数であり³、それに比べて、この時期の「アカツキ」には、まだ期待・希望といった意味は十分に定着してはいないと考えられる。では、実際の用例を見ていこう。

まず、望ましい出来事としては、戦争の終結、条約の改正、普選の実施、鉄道、運河の開通、大学、研究所の設立、都市の美観建設、改築の計画など、政治、軍事、社会、文化、科学事業に関する新しい事業の開始や施設の開設に関する例が多数を占める。

- 40) 露西亞の新政府は今の場合は飽くまでも聯合國と歩調を侶にして戦争を繼續せねばならぬが、現時の戦争を終結した暁は、撤兵又は減兵を提議し且つ自ら率先實行するが、即ち世界をして露西亞の新政の公明正義を仰瞻せしむる所以である。(『太陽』6「混沌の露西亞 革命の齋らす曙光」内田魯庵 1917 口語)
- 41) ではその議會勤王論を起すべき時機はいつであるかといへば、それは普通選舉實施の時機である。普通選舉が、實施された暁に於ては、國民は、もはや、議會の神聖ならざることをもつて、既成政黨の罪であるとか、或は代議士の罪であるとして、罪を人に嫁し、己れ自らは、責任なき如く稱へることは出来ないのである。(『太陽』11「日露國交と普選實施」永田秀次郎 1925 口語)
- 42) 今其面積を以て比較すれば我四國(千五百六十一方里)を山陽道(千五百七十方里)とを合せたるものと相近し、以上の概算に就て見れば愈々平和條約の批准せられたる暁には左の新領土を増加する勘定なり(『太陽』5「社会」1895 文語)
- 43) 大橋圖書館は、地を都門の中央、九段坂下の牛が淵に卜し、今其出願中なりと聞く。もし許可を得て、そこに建たむ暁には、公衆の閱覽上、殊に便利なるべき也。(『太陽』3「教育時評」大町桂月 1901 文語)
- 44) 日露の兩國、一朝争を千戈に訴ふるに至らば、陸兵の運動は、朝鮮境上に在り、而して西伯利鐵道全通するの暁には、十二日内外にして、露が平素養ふ所の甘軍團の十分一、即ち二軍團(四師團)を浦鹽港に集中することを得べきが故に、朝鮮を以て、我國防の

3 BCCWJを検索して得られた「暁には」の95例の用例の意味を調査したところ、「望ましい」と言える例は89例であった。

策源地と爲すこと、最とも必要なり、(『太陽』 7 「朝鮮問題」 川崎三郎 1895 文語)

- 45) 例へば、帝都附近に於ける代々木新宿驛の改築に鑑みるも、中央線對山手線の乗替設備完成されたる暁は、誠に結構であるけれ共、工事中に於ける乗替客の迷惑一方ならぬものがあつたことは、一度附近を通過せるものの直覺せる所であらうと考ふ。(『太陽』 5 「國有鐵道の建設と改良」 伊藤霞峰 1925 口語)

次に、望ましさに關して中立的な例を取り上げる。内容は様々である。

- 46) 元來志は政治にあるを以て、或る時代を經過した暁には、一度議事堂に於て、其抱懷せる思想と主義とを發表して見たいと思ふて居つた。(『太陽』 2 「故春汀鳥谷部銑太郎君法學博士 高田早苗君談」 高田早苗 1909 口語)
- 47) 其國語即ち英語にて一週に五六時間などと云ふやうにやつて居る所は少ないやうであります大概英語と云ふものが三時間位であるのでそれで決して中學校を了つた暁に文章が達者に書けないことがない自由に書けるので(『太陽』 9 「中學校に就て」 菊池大麓 1901 口語)
- 48) 墮國皇帝は最早餘程の老人であるから、其崩御せらるるは遠き未來でなからふと思ひます。其崩御せられた暁には、馬耳幹半島には必ず騒亂が生ずるのでありましょふ。(『太陽』 5 「滿州問題」 戸水寛人 1901 口語)
- 49) 兎に角脂肪は高き營養價を有することと、又胃液の分泌を抑制する作用があるので胃酸過多症や、胃潰瘍にも適當である。又體內で燃焼されたる暁には炭酸瓦斯と水となるから排泄時腎臓をあまり刺戟せぬ。そこで近頃は慢性の腎臓病患者にも少し宛用ひられて居る、脂肪を禁忌とする場合は猫「いらす」の如き急性燐中毒や加答兒性黄疸等の場合である。(『太陽』 1 「輓近に於ける食餌療法の進歩」 高田蒔 1925 口語)
- 50) 流賊共を驅り集め、先づ鴨綠江口の獐子島即今の獅子島に上陸し、之より龍川鐵山、宣川、郭山、定州一帶の地方を略して横行を逞うし、朝鮮でも一時は大に持餘した、けれど、放つて置く譯にも行かず、明は亡びる、清が一統の業を企んだ暁、最早彼に用はないといふので、到頭、之を討ち平げはしたが、其勢ひ猖獗にして、一時は大騒ぎをやらかした。最初の目的奈何に拘らず、彼の所爲は、宛然たる海賊であつた。(『太陽』 2 「表朝鮮沿岸の海賊と密貿易」 村田懋磨 1909 口語)

最後に、望ましくない出来事の例を挙げる。否定形式の例が目立つ。

- 51) お前は思ふたよりも愚痴な人かな、私が心は石よりも鐵よりも堅いぞや、まこと免れが

- たない暁には、コレ斯う言ふ舌を嚙で死まず、産神様かけて屹度死んで見せます、と死を誓へる妻の言葉に、悸とせし風情にて、(『太陽』6「新袈裟物語」宮崎三味 1895 口語)
- 52) もし、今期議會に於て普通選舉が通過しなかつた暁に於ては順境に向ひつつあつた労働運動は、逆轉して層一層悪化の傾向を呈するに至るであらうことを私は恐れるものである。(『太陽』3「普選實施後の労働運動」安倍磯雄 1925 口語)
- 53) 之は慶親覺羅が長白山から起つて、西の方中華に征め入つた時分に其族を擧つて行つたのが第一の原因、萬一明と輸贏を争うて、敗北した暁には、茲に退いて徐ろに捲土重來の策を講ぜんが爲め、又大森林は古來新勢力の勃興する處であつたから、發祥龍興の重地を空しく異族の蹂躪に委せざらんが爲め、四禁の制を布き、清野の法を施したのが第二の原因、夫から衣帶之水。(『太陽』4「西間島事情」村田懋麿 1909 口語)
- 54) 東郷大將が乗艦の夜一々將校を召して、事若し破るるの暁には、潔よく割腹せんのみの心事を打明す爲に、枕邊に白刃を備へて置き、之を各將校方に指し示したと云ふ。(『太陽』10「外人の日本觀 外人の見たる日本人の性格」) / 『レコー・ズ・シーヌ』* (訳) 1909 口語)

長い夜が明けて新しい朝が始まる時間を表していた「アカツキ」の意味が拡張し、「とき」の意味でも使用されるようになったとき、メタファーとして、新しい時代・段階に突入するという意味合いを引き継ぐことになったと考えられる。こうした新用法が生まれた段階では、あくまでも新しい時代・段階に入るということが意味の中心であって、望ましいことにも望ましくないことにも使用されていたと考えられる。そのような「アカツキ」の新用法に評価的な意味特徴が加わっていったのは、日本の近代化の時期と重なって、新しい国家・社会を建設していこうとする人々の前向きな気持ちと結びついて使用されることが多かったということとも関係があるのではないだろうか。

5. おわりに——文法化の現象として

以上、本稿では、『日本語歴史コーパス明治・大正編 I 雑誌』の用例調査を通して、「アカツキ」の近代における使用状況を様々な角度から記述した。そこには、現代語の「アカツキ」とは大きく異なる特徴が観察されるとともに、現代語につながる面も確認された。最後に、この観察結果を文法化の現象としてまとめておく。

大きな流れとしては、時間名詞から従属接続詞へという再範疇化が想定できる。具体的な変化としては、まず、実質語としての「早朝」の意味がなくなり、語彙の意味の漂白が起こっている。そのことと連動し、連体的な成分をとることが必須となり、主節と従属節の同時関係を表す従属複文を構成する非自立的な形式語に近づいている。この用法では文体的な制約からの解放も進んでいる。しかし、近代においては、この文法化はまだ途上であって、動詞の述語形式や格・とりたて形式の

分布は拡散しており、現代語とはかなり異なる様相を呈している。

以後、未来の出来事に限定されていくとともに、述語形式や格・とりたて形式の固定化が進み、望ましさの意味が語用論的に徐々に強化され、一方で、「早朝」の意味での使用がますます衰退していくと考えられる。そのプロセスを明らかにするのは今後の課題である。

参考文献

- 秋元実治 (2014) 『増補 文法化とイディオム化』 ひつじ書房
- 工藤真由美 (1995) 『テンス・アスペクト体系とテキスト』 ひつじ書房
- 鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』 ひつじ書房
- 田中 寛 (2003) 「『結果誘導』節における発話意図—主観性をめぐる一考察」『語学教育研究論叢』
20、大東文化大学語学研究所
- 田中 寛 (2010) 『複合辞から見た日本語文法の研究』 ひつじ書房
- 寺村秀夫 (1992) 『寺村秀夫論文集 I—日本語文法編—』 くろしお出版
- 村木新次郎 (2005) 「〈とき〉を表す従属接続詞—「途端 (に)」 「拍子に」 「やさき (に)」などを例として」『同志社女子大学学術研究年報』 56、同志社女子大学
- 村木新次郎 (2012) 『日本語の品詞体系とその周辺』 ひつじ書房
- Paul J. Hopper, Elizabeth Closs Traugott (1993) *Grammaticalization*, Cambridge University Press. (日野資成訳『文法化』九州大学出版会)

〈辞典類〉

- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編 (2000-2002) 『日本国語大辞典』 小学館
- 上代語辞典編修委員会編 (1967) 『時代別国語大辞典 上代編』 三省堂
- 室町時代語辞典編修委員会編 (1985) 『時代別国語大辞典 室町時代編』 三省堂
- 中田祝夫ほか (1983) 『古語大辞典』 小学館

